

カナダ英語の背景*

— カナダの暮らしと言語 (その1) —

浅 田 寿 男^{ひさ お}**

もこれまでの文献や巷間の情報を補うという意味で、本稿もいささかの意義はあろうと思う。

I. はじめに

一連の拙稿 (2009a, 2009b, 2009c, 2010) の冒頭でも述べたように、「言葉の背景にあるものを見ることは、言葉の理解を何より深めさせてくれる」という観点から、本稿は、それらの拙稿の趣旨を引き継ぎ、カナダ英語のより一層の理解のために、筆者自身がカナダのトロントに滞在した半年間の日常生活¹⁾から得た体験や知見をもとに、カナダの言語ならびにその日常生活や風俗・習慣のいくつかを取り上げて、特に我が国では知られていない側面を中心に論じたものである。上山・井上 (1993) の冒頭には「言語や文化はその国の歴史、気候や地理的な条件、社会、政治、経済、文化、教育等と密接な関連がある。また国民の生活とも関係があり、これらをはなれて言語や文学は考えられない。一つの単語や文章にも、それを使ってきた国民の歴史、文化が反映している。従って我々が言語や文学を研究するに際して、その背景を考察することは大切なことである」と述べられているが、奇しくも拙稿と趣旨を同じくしている。このように本稿の目的は、カナダ英語の背景について、個人の体験という限界や偏りは避けられないにしても、従来の書物の上の限られた知識や巷間の不十分な情報を補完したいというところにある。巷にはカナダの紹介や風物地誌に関する文献、研究書も数多いが、少なくとも

II カナダの暮らしと言語

1. カナダ英語の文法・語法研究について

カナダの歴史的、地理的状況から見ても、イギリス英語が基調となり、ここにアメリカ英語が次第に流入してきた経緯は予想するに難くないが、現在のカナダ英語において、どの面にイギリス英語が堅持され、どの部分にアメリカ英語が取って代わっているのか、といった点を規則的に記述するのは、広大な国土をもつカナダでは地域差も大きく認められることもあり、極めて困難であると言える。しかし、例えばオンタリオ州に地域を絞り、調査を進めることは比較的容易であり、またカナダ英語の文法・語法研究の推進の方向として、イギリス英語とアメリカ英語の分布の状況や混入の規則性を求めるよりも、個々のカナダ英語の事例研究を進め、特徴的な表現や用法と、それを生み出している文化的・歴史的背景を探ることから始めるならば、いずれはこれがイギリス英語とアメリカ英語の分布に規則性があるのか否かといった大きな問題にも解明の糸口を与えてくれると考えられる。このような立場から、個々の特徴的なカナダ英語の表現・用法を一つずつ個別に調査研究することを中心に進める。

*キーワード：カナダ英語、カナダの日常生活、カナダの伝統と文化

本文に掲載した写真のうち、撮影日を記したものは筆者自身が撮影した。

**関西学院大学社会学部、関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科教授

1) 本学の学院留学制度による支援を受けて、2010年3月22日から2010年9月20日までの半年間、カナダのオンタリオ州トロントにあるヨーク大学・英語学部 (Department of English, Faculty of Liberal Arts and Professional Studies, York University) に客員研究員 (Visiting Scholar) として滞在し、トロントで暮らす機会を得た。なお、この時の研究内容とその成果については、別途、『2010年度研究成果報告』(2011年秋刊行予定、関西学院大学研究支援課) で公表する。

2. イギリス英語とアメリカ英語の併存

上で述べたように、カナダの歴史的、地理的狀況から見ても、イギリス英語が基調となり、ここにアメリカ英語が次第に流入してきた経緯は明らかであるが、どの面にイギリス英語が保持され、どの面にアメリカ英語が取って代わっているのか、といった点は複雑であるし、またフランスの植民地でもあった歴史的経緯や、現在もケベック州を政治的配慮からフランス語圏として公認するカナダ政府の2カ国語政策も手伝い、フランス語やフランス文化の影響、それらの混入もカナダ英語の実態をさらに複雑なものにしている。

ここで、ごく身近な一例を挙げておくとすれば、カナダではどのような場合にも *centre* とイギリス英語の綴りを固守しながら、一方で「地下鉄」をアメリカ英語式に *subway* と呼ぶ。さらにはイギリス英語では「1階、2階」を *ground floor*, *first floor* と呼び、アメリカ英語では、それぞれ *first floor*, *second floor* と呼ぶのに対して、カナダでは、全くの両者の折衷でそれぞれを、*ground floor*, *second floor* と呼ぶ場合が多く見られる。このように複雑なイギリス英語とアメリカ英語の影響やその規範が併存している現状において、特徴的なカナダ英語の表現・用法を個々に調査研究することは理に適っていると考えられる。

3. Toonie Tuesday

カナダ以外の国や地域では決して見られないカナダ英語を代表する特徴的表現の一つに *Toonie Tuesday* という謳い文句があり、例えばカナダ国内のファーストフード産業を中心に毎日のように用いられ、日常語化している。



写真1 Toonie Tuesday [KFC(Kentucky Fried Chicken Corp.) 9月広告] (2010年9月1日撮影)

この表現一つを取り上げても、なぜこのような表現がカナダで日常語化しているのかを考えれば、単純に、カナダの2ドル硬貨の俗称が *toonie*

であるから、韻を踏んで（つまり、語呂を合わせて）使われているといったような辞書の説明では不十分である。



写真2 右からカナダ2ドル硬貨のオモテ1種とウラ2種 (2010年8月18日撮影)

まず、なぜ2ドル硬貨が一般に *toonie* と呼ばれるようになったのかという点があるが、そもそも1ドル硬貨がその俗称として *loonie* と一般に呼ばれることから、この2ドル硬貨も *two* と *loonie* の「かばん語」(*portmanteau word*) として *toonie* と呼ばれるようになったことは明らかである。

The informal, popular name for what the Canadian Mint calls the one-dollar coin is the *loonie* (plural *loonies*). The two-dollar coin has been dubbed, by analogy, the *toonie* (plural *toonies*). The *loonie* was introduced in 1987, the *toonie* in 1996. The spelling of both words, now stabilized, varied for a while: *looney*, *loony*, *twonie*, and *twoonie* were all briefly tried but rejected. — *Oxford Guide to Canadian English Usage*, p. 308.

では、なぜ1ドル硬貨が、そもそもその俗称として *loonie* と一般に呼ばれるようになったのか。この点については、多くのカナダ英語の辞書に明記されている通り、1ドル硬貨にカナダの国鳥と言うべき水鳥の一種「あび」(*loon*) が硬貨表面の図柄として刻印されているからだということになる。

In May 1987, the Canadian government, in an attempt to cut costs, introduced an 11-sided, gold-coloured coin to replace the one-dollar bill. The move wasn't a popular one and in jest, Canadians

took to calling the coin “Mulroney’s Loonie,” after then Prime Minister Brian Mulroney. Not only did the term rhyme, but loonie perfectly described the new coin. Made of aureate bronze plated onto pure nickel, the loonie depicts on its reverse side a loon drifting lazily through a lake. —Thay (1977 : 82)



写真3 右から1ドル硬貨オモテとウラ (2010年8月18日撮影)

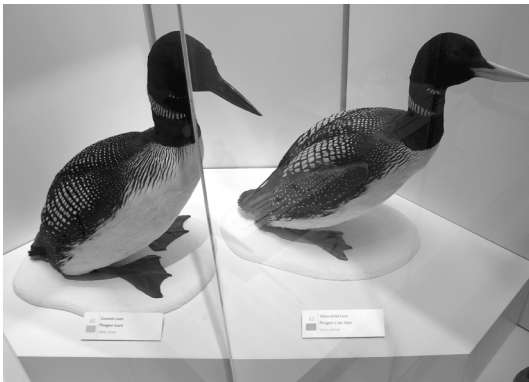


写真4 Canadian Museum of Nature (国立自然博物館) に展示されているカナダに生息する Loon 2種の剥製 (2010年6月21日撮影)

しかし、この硬貨製造の歴史に目を向ければ、「あび」が図柄に選ばれたのは、全くの偶然であったことがわかる。当初、カナダ造幣局が予定していた図柄は、カナダの狩猟民族 (voyageur) がカヌーに乗っているものであった。この予定が全く偶然の事故で、オタワの造幣局で作られたこの硬貨の製造原盤が、1986年11月3日に、ウィニペグの製造所に運び込まれる直前に紛失し、急遽、間に合わせのために、予備として準備されて

いた第2候補の「あび」の図柄の原盤から1ドル硬貨が製造された²⁾という隠された経緯があった。

The loon was designed by famed wildlife artist Robert-Ralph Carmichael, but it was not the original intended design. The plan was to have a voyageur, but he got lost during his portage to the Royal Canadian Mint in Winnipeg. No matter. The loon is Canada’s national bird and while it didn’t gain popularity until 1989 when the Royal Canadian Bank stopped producing one-dollar bills, the coin quickly became common, weighing down the pockets and purses of Canadians everywhere. The name loonie stuck. —Thay (1977 : 82-83)



写真5 幻となった1ドル硬貨のデザイン (Webサイト「Loonie Design」掲載の写真より)

したがって今日、カナダで日常語化している標題の Toonie Tuesday も、当時の造幣局の偶然の事故さえ無ければ、存在していなかったということはたいへん興味深いことである。

4. Walk-in Clinic—カナダの医療事情、病院事情—

カナダで Walk-in Clinic と言えば、予約や紹介状なしに、いわゆる飛び込みで初診が可能なカナダ独特の病院や診療所の名称である。

カナダではファミリードクター (Family Practitioner) 制度が行き渡り、日頃、健康管理をしてもらうファミリードクター (かかりつけ医) を通じて専門医や専門病院を紹介してもらう。したがって日本とは異なり、基本的には病院

2) Web サイト「Loonie Design」(<http://www.snopes.com/business/money/loonie.asp>) の記述を参照。

や診療所に初診で飛び込んで診療や治療を受けることができない。

しかし周知のように移民の国カナダ、移民の街トロントとして知られるだけに、様々な国の人々が様々な形で住み暮らしているの、ホームドクターを持たない人や保険証を持たない人もまた多いので、初診で飛び込める Walk-in Clinic は重宝されている。ちなみにカナダでは各州が独自に健康保険制度を作っているの、オンタリオ州居住者は、オンタリオ州健康保険制度 (OHIP: Ontario Health Insurance Plan) を利用することになり、加入者は歯科、眼科を除いたほぼ全ての医療費がカバーされることになる。



写真6 地下鉄 Christie 駅近くの Walk-in Clinic (2010年8月21日撮影)

筆者は2010年3月下旬から半年間、オンタリオ州トロント市郊外のヨーク大学で在外研究に従事したが、思いがけないことに、同伴した家内が滞在中に病に倒れ、現地で治療を受けることになった。このために、日本の医療制度と大きく異なるカナダの医療を受けることになったが、この保険証 OHIP を持たない私たちは、持参した海外旅行保険に頼ることにした。この保険会社と提携している病院が、アメリカにはハワイ州も含めて50軒以上もありながら、カナダにはバンクーバーに1軒、ウィスラーに1軒、トロントに1軒しかないことに驚いたが、幸いにもトロントで唯一の提携病院がバスや地下鉄を乗り継いで小1時間ほどで通える所にあった。そこで早速、その提携病院に電話をかけたが、なんと間が悪いことに、10日間ほど休診する旨の留守番電話メッセージが流れる

だけであった。弱り果ててヨーク大学の知人に相談すると、学内に Appletree Medical Centre という Walk-in Clinic があるので、まずここで受診することを薦められて、初めて Walk-in Clinic という病院の存在を知った。

Walk-in Clinic の診察料は、OHIP を持っていれば無料であるが、持たない場合は、各 Clinic が独自に定めている料金を払って受診することになる。この Appletree Medical Centre では定められた62ドルの受診料を払って受診した。日本円に換算して約6千円という診察料は、まずまず良心的な料金だと思われる。

町中の Walk-in Clinic では順番が来るまで、かなりの時間、待たされると聞いていたが、ここは学内の Clinic であるので、時期的にも夏の学期中の7月で、学生数もふだんより少なく、付近の一般住民も利用するとは言え、幸い、わずかな待ち時間で診察を受けることが出来た。



写真7 ヨーク大学内にある Walk-in Clinic『Appletree Medical Centre』(2010年8月16日撮影)

医師による診察や検査が終わると、最後に Prescription (処方箋) を書いて貰い、それを薬局に持参して薬を購入することになるが、たとえ OHIP を持っていたても、薬の購入は全額、自己負担となる。ヨーク大学では、この Clinic の隣に York Lanes Pharmacy という薬局があり、たいへん便利であった。ちなみに、この時、1日3回服用する antibiotics (抗生物質) を5日分処方されたが、薬局での支払いは、手数料も含めて20ドル程度、日本円にして2千円に満たず、日常の常備



写真8 ヨーク大学内の薬局『York Lanes Pharmacy』
(2010年8月16日撮影)



写真9 救急病院 Humber River Regional Hospital の
外観 (2010年7月23日撮影)



写真10 救急病院 Humber River Regional Hospital の
救急車 (2010年8月18日撮影)

薬を購入する際にも感じたことだが、日本に比べてカナダでは医薬品が安いと感じられた。

さて初回の診察と薬で大丈夫だと思ったが、その後も良くなりず、再びヨーク大学のこの Walk-in Clinic に行き、もう一度、診察を受けたところ、抗生物質を drip-feed (点滴注入) で受けるように指示されて、至急に救急病院へ行くようにと、紹介状を貰った。

この救急病院では、救急外来 (emergency) と言いながら、まず院内の「Triage」(治療優先順位の選別) の窓口で看護師と面談し、なぜこちらへ来院したのかという事情や症状を詳しく確認してから、急を要する場合にはそのまま院内へ通されるようであるが、たいていは長時間、診察を待たされる。当地の暮らしの情報誌 *bits TOWN* (June 30, 2010) によれば、「最近の傾向として、待ち時間は2～3時間から長い時には5時間などと言われている」(同、p.60) とのことで、家内の場合も受付後、診察室に通されるまでに2時間ほど待たされたが、これはまだ短い方である。ちなみにヨーク大学の Walk-in Clinic で書いて貰った紹介状は、この Triage で、ほとんどどの役にも立たなかった。

順番を待っている間に女性が手を切って、かなりの出血をしているにも関わらず、Triage を経由し、診察室に通されるまでにずいぶん待たされていたが、はたして Triage のシステムはこれで良いのか疑問に感じられたし、医師不足、看護師不足、病院不足を痛感した。



写真11 Humber River Regional Hospital の Triage 付近。皮肉にも、この写真の撮影時には救急外来の患者がほとんどなく、院内が落ち着いていた。(2010年8月18日撮影)

結局、家内は2時間ほど待った後、診察室に通されたが、ここは診察室とは言い難い代物で、診察用の簡易ベッドや検査機器は置いてあるものの、単に大きな部屋をカーテンで仕切っただけのスペースに過ぎなかった。ここでも医師が診察に来るまで小一時間、待たされた。ようやく医師が来て一応の検査や診察が終わった後に、ヨーク大学の Walk-in Clinic で指示された通りの、抗生物質の drip-feed (点滴) を受けることになったが、すぐに指示された治療にかかってくれたなら、時間も労力も大幅に節約できたのにと内心、思った。

院内は乳幼児からお年寄りまで、様々な傷病の患者であふれており、その上、頻繁に救急車が到着しては、重装備の救急隊員が何人もかかって、一刻を争う患者を、慌ただしく運び入れて来る。そのような状況なので、点滴でさえベッドに横になって受ける場所もなく、何時間も椅子に座ったまま受けさせられた。次々に患者が増えるので、カーテンで仕切られただけの診察スペースすら足らず、次々と患者が診察スペースから追い出され、大部屋の片隅にどうにか居場所を作り、椅子にすわったままスタンドを抱えて点滴を受けさせられる。このような患者は、この時、家内を含めて少なくとも10人はいた。

医師もてんでこ舞いであることはわかるが、最初に診察してくれた医師が数時間後には別の医師に交代する。交代するのは致し方ないとしても、突然、この2人目の医師が独断で、点滴を受けるだけのつもりで何の宿泊準備もして来っていない家内に、急に入院するように指示するので、どうして良いのやら途方に暮れたが、結局は、そのまま病院に泊まるしかなかった。

入院とは名ばかりで、まともな部屋もなく、かろうじて置かれた簡易ベッドに横になり、人工透析を受けている患者が大勢いるほか、点滴の患者は、ひたすら部屋の片隅で、椅子に座ったまま長時間も過ごしている。たまに看護師が巡回して、点滴の薬液が無くなったのを見ると、新しい薬液に取り替えるだけ。食事や飲み物も一切、世話してくれない。必要に応じて家族や知り合いが付き添って、食事や飲み物を差し入れ、世話をするしかない。筆者の場合、取る物も取り敢えず、家内

を急いで連れて来たので、夕刻になりアパートのことが心配で、まともな病室もなく、看護らしい看護も受けられない病院に、しかも英会話に不自由な家内を一人、病院に残すのは不安でならなかったが、売店で飲み物とパン類を買い、手渡してから、後ろ髪を引かれる思いでアパートに戻った。

その夜、家内のことが気がかりで、まんじりともせず一夜を明かし、翌朝早く、病院を訪れ、点滴のお陰で回復した様子を見て、その場で家内を病院から連れ戻した。昨夜の様子を尋ねると、夜の9時過ぎになって、ようやくキャスター付きの簡易ベッドが与えられ、横にはなれたが、ベッドを置く部屋もなく、廊下の壁際に、ベッドを車の縦列駐車のように並べて夜を明かしたとのことであつた。喉が渴いても、看護師が水1つ持って来てくれるわけでなく、またその一方で、自由に院内の売店に出て行かせてもらえるわけでもないので、点滴の道具を引きずって、手洗い所へ行き、そこの水道水で渴きを癒したとも聞いた。また、ベッドに横になれても廊下に寝ているので、しょっちゅうベッドの脇を救急隊員が行き交うので、まともに眠れなかったとのことであつた。

幸い家内の病状も一昼夜に及ぶ点滴のお陰で、目に見えて回復したので、簡単には退院させてくれない病院に対して、すぐに日本に帰るので、本格的な治療が必要となれば日本で治療を受けると強く申し立てて、強引に家内を退院させ、連れ戻った。救急病院でも、先に述べた OHIP を持っていないと、昨日の受診時に600数十ドルを求められ、翌日の退院時にも、再び600数十ドルを求められ、結局、一泊二日の治療だけで、薬代とは別に、日本円にして約13万円も払うことになり、医療費が余りにも高額であることには驚いた。ちなみに、この時にお世話になったアフリカ出身の女性看護師に、「保険がないので治療費が高くて、長く入院できない」と本音を漏らしたら、彼女の母親もアフリカから旅行に来た時、たまたま病気で治療を受けたところ、2,000ドルを要求され、医療費の高さに驚いて、すぐにアフリカに帰ってしまったと話してくれた。これがカナダの一般的な医療の実態なのであろう。

あまりにもショッキングな体験であつたので、

つい長くなったが、いずれにしても、日本とは大きく異なるカナダの医療を経験して、単なる言葉や表現に留まらず、社会の奥深い一面を垣間見ることができた。

Ⅲ むすびに

以上、一連の拙稿（2009a, 2009b, 2009c, 2010）の趣旨を引き継いで本稿は、言葉の背景を見ることによってカナダ英語をさらによく理解するために、トロントでの体験や知見に基づいて、カナダの言語や暮らしに関わるトピックをいくつか、許された紙幅の中で取り上げた。従来の限られた知識や巷間の情報を少しでも補完したいと願ったことである。もちろん限られた紙幅ゆえに取り上げられなかったことも多いので、今後も機会を捉えて続編を公にしたい。

参考文献

- 浅田壽男. 2009a. 「イギリス英語の背景—イギリス人の暮らし—」『言語理論の展開と応用—西川盛雄教授退官記念論文・随想集—』pp. 5-18. 東京：英宝社.
- 浅田壽男. 2009b. 「イギリス英語の背景—イギリス人の暮らし（その2）—」『言語と文化』第12号. pp. 11-23. 関西学院大学：言語教育研究センター.
- 浅田壽男. 2009c. 「イギリス英語の背景—イギリス人の暮らし（その3）—」『社会学部紀要』第107号（真鍋一史教授退職記念号）. pp. 99-112. 関西学院大学：社会学部研究会.
- 浅田壽男. 2010. 「イギリス英語の背景—イギリス人の暮らし（その4）—」『言語と文化』第13号. pp. 19-35. 関西学院大学：言語教育研究センター.
- 上山泰・井上澄子. 1993. 『イギリス風物誌』東京：篠崎書林.
- Thay, Edrick. 1977. *Weird Canadian Words: How to Speak Canadian*. Canada: Folklore Publishing.
- 辞書・雑誌**
- Fee, Margery & Janice McAlpine. 2007. *Oxford Guide to Canadian English Usage*. Second edition. Ontario: Oxford Univ. Press.
- bits TOWN. 2010-2011 vol.2. (June 30, 2010) Toronto: Bits Box Inc.
- インターネット Web サイト**
- Loonie Design (snopes.com)
<http://www.snopes.com/business/money/loonie.asp>
 [2010年8月18日]

A Background Study of Canadian English

— Canadian Daily Life and Language (1) —

ABSTRACT

A more complete understanding of the background of language will be effective in any approach to the grammar and usage of language. In a series of my papers (2009a, 2009b, 2009c, 2010), we have argued that daily life in England—from the author's personal experiences and knowledge from having lived in Nottingham, England—will help in an understanding of British English.

From March to September in 2010, the author was able to live and study in Toronto, Canada as a visiting research scholar at the Department of English, the Faculty of Liberal Arts and Professional Studies, York University, with financial support from Kwansei Gakuin University.

Toronto, the largest city in Canada, is fairly close by Ottawa, the capital city, and is situated less than several hours from French/English bilingual region of Quebec. It also has excellent transportation links to other areas in Canada, making it is one of the best areas for the study of Canadian English.

Daily life and research at York University was most useful, and the author was able to gain many valuable insights into the culture of the Canadian people, as well as discovered many things not known before.

The present paper deals not only with Canadian English but also with Canadian culture, involving a number of aspects of everyday life in Canada including the manners and customs of the Canadian people. The topics I deal with are (1) grammar and usage of Canadian English, (2) influence of British and American English, (3) familiar expressions, such as *Toonie Tuesday*, and (4) *Walk-in Clinics* in Canada. It may safely be said that these topics are explored from points of view not well known here in Japan.

Daily life in Toronto showed a number of real images and actual situations of life in Canada not well known in Japan. In addition, the author has been inspired to study its background so as to have a better understanding of Canadian English.

It is hoped that the paper the author is currently writing on the background of Canadian English will add to the information already known, and will lead to a more complete understanding of the language as well as daily life in Canada.

Key Words: Canadian English, Canadian daily life, Canadian culture and tradition